

【学術論文】

島嶼におけるエコツーリズムの展開 — 長崎県上対馬地域の住民意識調査から —

深見 聡*

The Development of Ecotourism on Islands — A Survey Conducted among the Residents of the Kami-Tsushima Area of Nagasaki Prefecture, Japan —

Satoshi FUKAMI

Abstract

This research looked at the potential for ecotourism in the Kami-Tsushima area of Nagasaki Prefecture where natural resources are currently underutilized, and at first tries to understand how the residents evaluate their area and how they feel about ecotourism, and then reviews how ecotourism could be developed in the future in the Kami-Tsushima area.

The result showed that ecotourism projects appear promising as a way to increase tourists in the Kami-Tsushima area. It was pointed out that among the projects the development based on non-transferrable and fixed assets such as nature and culture could only be established as being sustainable when the development is combined with the collaborative efforts of locals.

It is also important to note that the future of ecotourism should urgently take into consideration the increase in the number of Korean tourists, which is not evident on other islands in Japan. Fortunately the concept of ecotourism, as seen in the Olle walking paths of the Jeju Islands, has won the support of the people in Korea. Korean tourists should therefore be considered as a resource which could have a great impact on the success of ecotourism in Kami-Tsushima area.

Key words : Kami-Tsushima, Island Tourism, Ecotourism, Korean Tourists, Consensus

1. はじめに

本格的な少子高齢社会の到来とその進展は、経済市場規模の縮小や偏在化といった構造的転換をもたらすことが予測されている。そのなかでも、大部分の島嶼では、本土に比べ地域コミュニティを支えてきた社会的、経済的基盤の消失がすすみ、社会生

活を支えるさまざまな機能にすでに先行した変化がみられつつある¹⁾。

一方で、定住人口の減少が避けられないことから、政府や地方自治体は、都市と地方の人びとの往来による交流人口の拡大に力を注ぐようになってきている。その典型的な施策として、観光振興が挙げられる。国レベルでは、2007年1月に観光立国推進基本法を施行、2008年10月に観光庁が発足している。地方自治体レベルでは、基本計画の策定にあたって観光

*長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

受領年月日 2012年10月31日

受理年月日 2013年1月23日

を掲げ、地域振興の核に据えるのがもはや当たり前のようにになっている（深見・井出，2010）。

交流人口の対象は国内の人びとに限られるものではなく、外国人の観光客も含まれる。国際観光振興機構によると、2002年の日本人海外旅行者数が年間約1,600万人であるのに対して、日本を訪れる外国人旅行者が524万人と約3分の1にとどまっていた。そこで、国土交通省が中心となって「グローバル観光戦略」が策定され、実行すべき戦略として「外国人旅行者訪日促進戦略」が設定された。この1つとして2003年からビジット・ジャパン・キャンペーンが展開され、小泉純一郎内閣総理大臣は第165回国会の施政方針演説において、日本を訪れる外国人旅行者の数を2010年に2003年の2倍にすることを目標としてかけた²⁾。

これをうけて地方自治体レベルでも、外国人観光客の受け入れ体制について具体的な検討が加速することとなる。本稿で扱う長崎県では、対馬への韓国系観光客の目標値を算定し、その達成のため対馬全域を「しま交流人口拡大特区」として構造改革特別地域に提案・申請し、2003年11月28日に認定をうけた。

2005年に開催された「愛・地球博」の際に、韓国人の短期滞在ビザを免除する措置が恒久化されて以来、対馬は韓国人観光客にとっていわゆる「安近短」で訪問可能な海外旅行先として定着していく。現在、対馬市では人口34,397人（推計値、2012年6月末現在。）に対して2倍以上の韓国人が訪れている（図1）。2011年10月よりJR九州が比田勝一釜山間に

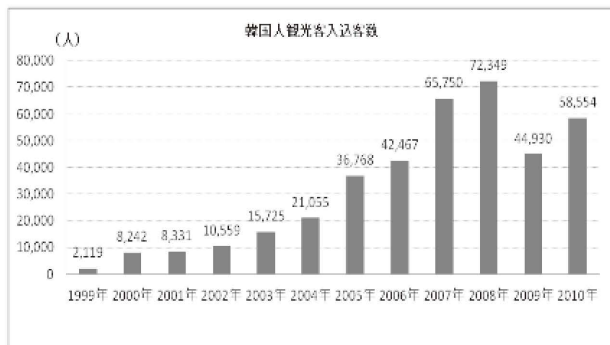


図1 対馬への韓国人入込客数

注：1999年～2007年の数値は法務省『出入国管理統計年報』、2008年～2010年の数値は2011年4月17日付けの長崎新聞記事をもとに、筆者が作成。

新たな国際定期航路を開設したことによる利便性の向上は、今後韓国人観光客さらなる増加が予測されている³⁾。

現状では、韓国人旅行者の多くは韓国の旅行会社

が提供するツアーに参加する形で対馬を訪れており、現地から韓国人の通訳ガイドが同行し、大型バスで厳原を中心とする下対馬地域の観光スポットをめぐるという行程が主流となっている。2008年に対馬観光物産協会が韓国人観光客に実施したアンケートによれば、対馬を訪れる動機の9割は観光で、具体的には、歴史（体験）、登山、景観、釣りを目的としていることが明らかになっている。いわば、対馬の自然や文化を背景に存在する観光資源を活かすという、エコツーリズムの一種としての性格を有していることがうかがえる。

しかし、韓国人観光客が増加し始めた当初、対馬の住民の多数は積極的に対応策をとらなかった⁴⁾。むしろ、接触を避けるかのように敬遠し、その間に韓国系資本の企業がビジネスを独占するという状態が形成されていったとの指摘もある（島川，2009）。韓国人観光客は、おもに韓国系資本のホテルや飲食店を利用するため、観光客の増加が対馬の人びとに思ったほどの波及効果をもたらしておらず、「観光地対馬は、韓国人により韓国人のために作られたと言っても過言ではない」（山田吉彦，2007）と言われるようになった。

しかし、近年では徐々に住民の活動も広がりはじめ、それに加えて個人で訪れるリピーターも増加しており、わずかではあるものの観光形態に変化が生まれている。それらを支援する取り組みとして、対馬市が中心となりながら、(財)対馬国際交流協会釜山事務所の設立や、国際交流員による韓国語講座やイベントの開催など、住民が対馬と韓国の相互理解につながる機会の提供がなされている。また、下対馬地域の旧厳原町にある対馬市交流センター内に韓国語支援センターが開設され、サポーターと呼ばれる通訳が週4日常駐することで観光案内やショッピングでの相談やトラブル対応にあたっている。民間でも個人や団体での活動が活発になっており、観光バスや観光タクシーを運行する事業者も増加している。また、下対馬地域にある長崎県立対馬高等学校では2003年に国際文化交流コースが設置されるなど、若年層の人材育成も図られている。

また韓国人観光客ばかりでなく、国内観光客の増加を望む声も当然ながら根強いものがある。2005年、国内観光客の増加を図る目的で、対馬グリーンツーリズム・ブルーツーリズム協会が設立され、都市部からの観光客誘致がおこなわれている。実数として大きな変化はみられないものの、たとえば、(有)対馬エコツアーの利用者の多くは国内観光客であり、

リピーターも増加傾向にある。このことから対馬ならではの自然を活かす路線は、国内観光客にも十分受け入れられるといえよう。同社は、同時に韓国人観光客の獲得をねらい、韓国語版のホームページの開設や、韓国の旅行会社への営業活動を展開している。現在、韓国では空前のトレッキングブームが起きており、トレッキングを目的として対馬を訪れる旅行者も増えている。

繰り返しになるが、韓国人観光客の増加や国内観光客の誘致活動が、速効性をもって対馬の活性化につながっているかと問われれば、住民の実感は決して高くはないであろう。ただ、対馬のような自然や文化を活かす観光形態は、広義にエコツーリズムの一つといえ、エコツーリズムの展開にあたっては、自然環境への負荷の予測、地域住民や観光客の志向といった事前の検討が慎重になされる必要がある⁵⁾。その意味では、エコツアー（エコツーリズム）の取り組みが広がりつつある今日こそ、対馬で必要なルールを探る時機にあるととらえるべきであろう。国内観光客はもちろんのこと、増加傾向にある韓国人観光客に対する配慮を深めることは、「豊かな自然環境と人々の生活が密着している所では、環境への負荷が直接生活環境の悪化を招きかねない。」（市田ほか、2005）条件の高い島嶼では、とりわけ喫緊の課題といえる（Hall, C.H. & Lew, A.A., 2009）。

島嶼におけるエコツーリズムの先行研究は、西表島や小笠原諸島、屋久島など「もともと観光地として知名度の高い、いわば「主流」とも言える離島」⁶⁾を扱ったものが比較的多い。他方、これからエコツーリズムの仕組みを本格的に取り入れようという状況にある「主流の離島」以外を対象とした研究は少ない（宮内、2009）。そのなかでは、対馬の集落の観光に対する可能性を「野生動植物を中心に置きつつもそれだけに頼ることなく、離島という立地、文化や景観など集落のもつポテンシャルを利用」する必要性を説いた堀江（2006）や、本稿で扱うのと同じ上対馬地域を対象として韓国人観光客向けの観光プログラムの開発と人材育成の必要性を説いた佐藤・藤崎（2011）、鹿児島県十島村（トカラ列島）を対象として、離島の観光事業は「自然環境や住民生活にとって負荷を調整しやすい形態」を志向することの妥当性を指摘した大田（2012）が注目される。しかし、いずれもエコツーリズムに代表される島嶼の観光で主導的な役割を担うことが期待される住民、とくに現在の主要な担い手と位置づけられる商店街に暮らす人びとや、将来の担い手とされる若年層の

意識にまで踏み込んだ検討はなされておらず、より地域の実情をリアルに把握する必要がある。

以上のような状況を踏まえて本稿では、長崎県対馬市の中心地である旧厳原町から離れ、エコツーリズムを推進していく際の自然観光資源が比較的未利用の状態が存在する（これからエコツーリズムの取り組みが具現化される状態にある）上対馬地域を対象として、上対馬地域に暮らす住民は自地域をどのように評価し、エコツーリズムをどのようにとらえているかを、アンケートをもとに把握し、今後の上対馬地域におけるエコツーリズムのあり方について検討していく。

2. 調査対象と方法

アンケート調査（「付録」を参照）は、エコツーリズムという観光形態による地域活性化のテーマを考慮して、その恩恵をうける地域商店街に暮らす住民を対象者とし⁷⁾、上対馬地域で国際航路の発着点となっている比田勝港に程近い比田勝・佐須奈の両商店街で実施した。また若年層の意識を知るため、上対馬地域で唯一の高校である長崎県立上対馬高等学校の生徒を対象として実施した（図2）。



図2 調査対象地域の位置

注：この背景地図等データは、国土地理院の電子国土Webシステムから配信されたものである。

2011年7月19～22日にかけて、比田勝商店街と佐須奈商店街に暮らす住民、長崎県立上対馬高等学校生徒から、それぞれ91名、50名、142名の計283名から回答を得た。年齢別の内訳は図3のとおりである。この結果から、上対馬地域の住民が地元の観光の現状に対してどのような意識を持っているのか、

その特徴を考察していくことにする。なお、次章に掲載する自由筆記回答のうち、とくに重要と思われる箇所については筆者の判断で下線を施している。

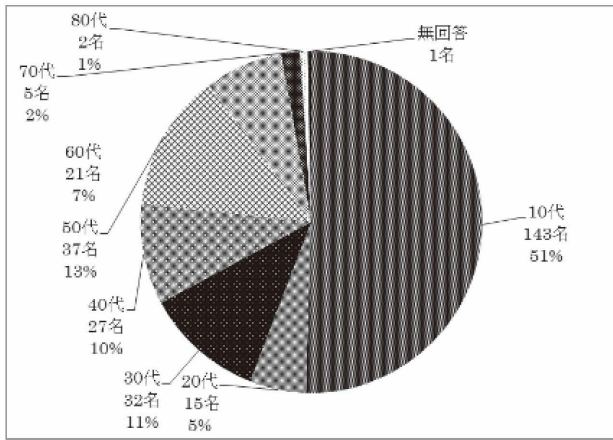


図3 アンケート回答者の年齢別割合

3. 調査結果

3. 1 現在の対馬の観光について

①これからの対馬に「観光」は重要か

「かなりそう思う」(103名, 36%)と「ある程度そう思う」(132名, 47%)を合わせた回答が約8割を占めた(図4)。「あまりそう思わない」(19名, 7%)と「全くそう思わない」(6名, 2%)に比べて、大多数の住民は対馬地域には観光への取り組みが重要であると認識されていることがわかる。

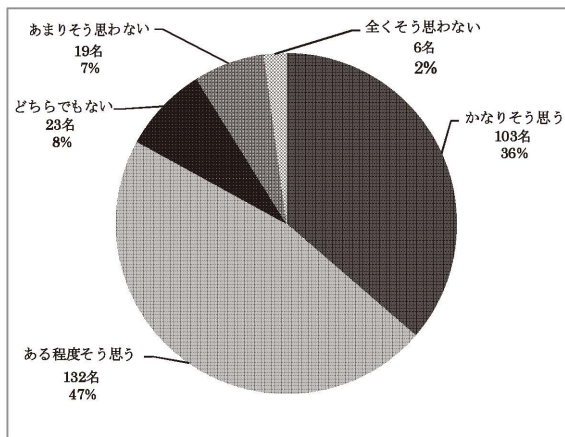


図4 これから「観光」は重要か (n=283)

注：付録にある質問紙の質問3の回答を集計。

自由筆記の回答に注目すると、観光が重要と考える理由として、「あまり知られていないと思うから、上対馬の良い所をもっともっとたくさんの人に知ってもらいたい。」(回答場所：上対馬高校、年齢：17歳、性別：女性、職業：高校生)、「過疎化が進み交

流人口の拡大は地域を活性化させるために必要だから。」(比田勝、46、男、公務員)、「対馬には見どころ、おいしいものが多く、もっと知ってもらうことで経済効果も期待できる。都会で味わえないものがあり、都会の人はそれを求めていると思う。」(佐須奈、40、男、公務員)のような積極的理由が挙げられている。一方で、「他の産業の発展が期待できないから」(比田勝、45、女、自営業)、のような消極的理由も僅かながらみられた。

重要とは考えない理由として、「海も山もマナーが良くなければ自然を壊すこともある地域振興よりも自然のほうが大切だと思うから。」(佐須奈、41、女、自営業)、「地理性(最西端の県の離島であるということ)交通アクセス(島内・島外)を他の観光地と比較すると、短期旅行(日帰りや1~2泊の旅行)には向いていないため。」(佐須奈、33、男、公務員)、などが挙げられた。

②上対馬はよい観光地とを感じるか

「かなりそう思う」(27名, 10%)と「ある程度そう思う」(94名, 33%)を合わせた回答43%が、「あまりそう思わない」(74名, 26%)と「全くそう思わない」(16名, 6%)を合わせた回答32%を上回った。また、「どちらでもない」(70名, 25%)と判断を躊躇する割合も一定程度存在する結果となった(図5)。

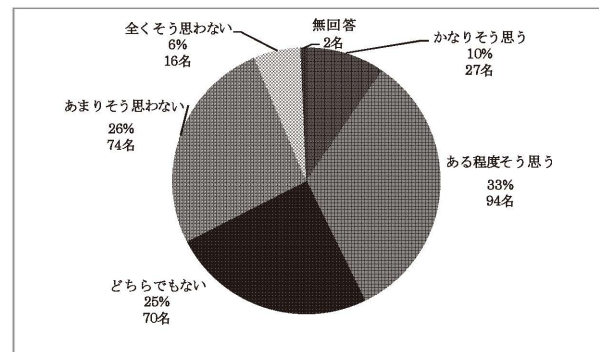


図5 上対馬はよい観光地か (n=283)

注：付録にある質問紙の質問5の回答を集計。

自由筆記の回答に注目すると、よい観光地であるとする理由として、「きれいだから、自然がいっぱいあるから。」(上対馬高、17、女、学生)、「いろいろな名所があるから。」(上対馬高、16、男、学生)、「上対馬にしか生息しないヒトツバタゴや国境の町という上対馬特有のものを生かし、就職先などを確保し人口の流出を防ぐことができると思うから。」(比田勝、28、女、公務員)、「魚、食べ物が新鮮でおいし

い。」(佐須奈, 67, 男, 自営業)などが挙げられた。

よい観光地ではないと考える理由としては、「多くの人に豊かな自然を知ってほしいけど、観光客によりポイ捨てなどが増えて自然がそこなわれるのは嫌だから。」(上対馬高, 16, 女, 学生)、「地域振興に観光は大いに役立つが、特に目立った観光地がないため。」(佐須奈, 25, 男, 公務員)、といった意見が目立った。すなわち、受け入れ側の仕組みづくりの未熟さと、そもそも自地域を観光地として認識していないことに起因する結果となっている。

ここで①②の設問について、比田勝商店街・佐須奈商店街・上対馬高校の対象地別回答を比較すると、比田勝・佐須奈のいずれにおいても、観光が重要であると認識する一方で、現状の上対馬は観光地としての魅力に欠けると感じている割合が高いなど、ほぼ同じような回答の傾向がみられる(図6)。

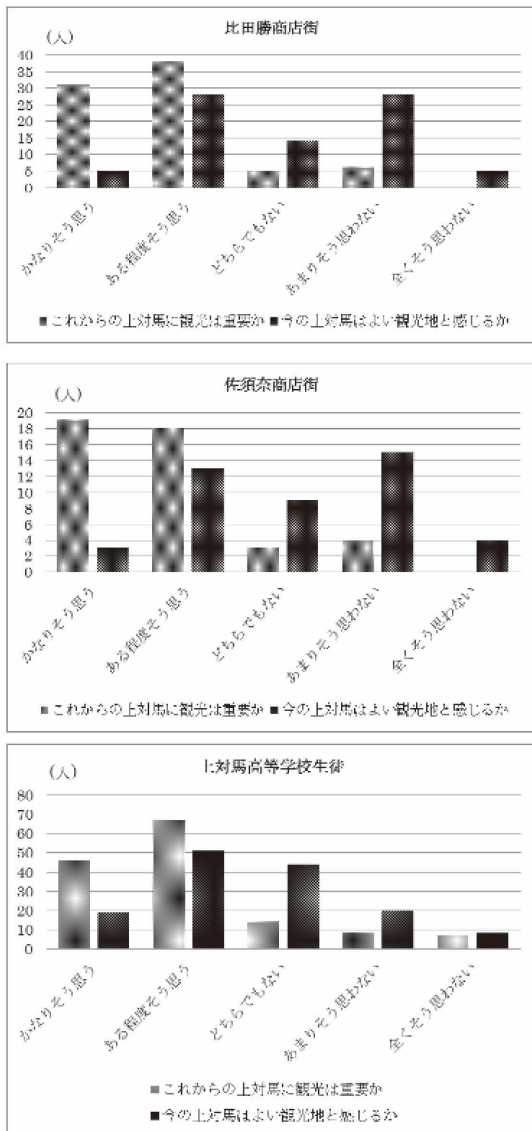


図6 ①②の設問の回答比較

それに対して、上対馬高等学校の生徒はどちらの質問にも肯定的な割合が高くなっており、若年者が自ら暮らす地域へ肯定的視点を向けていることがうかがえる。

3.2 これからの上対馬の観光について

①上対馬の「観光」で何をもっとアピールすべきか

この設問では最大3つまで回答してもらった。その結果、「自然(海)…魚の幸料理、シーカヤック等。また、それらを生かしたイベント。」(229名, 81%)がもっとも多く、次いで「自然(山)…山の幸料理、

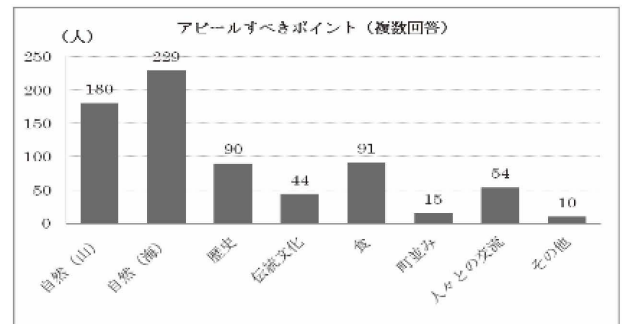


図8 上対馬の観光客誘致すべき対象

注: 付録にある質問紙の質問8の回答を集計。

植物や昆虫、鳥類等。また、それらを生かしたイベント。」(180名, 64%)と、自然環境資源の魅力を発信していくべきという回答が、他の選択肢の回答のおよそ倍以上に達した(図7)。

②上対馬の観光客誘致で力を入れる対象は誰か

この設問では最大3つまで回答してもらった。その結果、「日本人男性(20代後半~30代)」(100名, 14%)がもっとも多く、「韓国人観光客」(94名, 13%)、「日本人女性(20代後半~30代)」(91名, 13%)と続いた。全体的には20代後半から60代の国内観光客と、韓国人観光客の誘致を挙げる割合が比較的高かった(図8)。

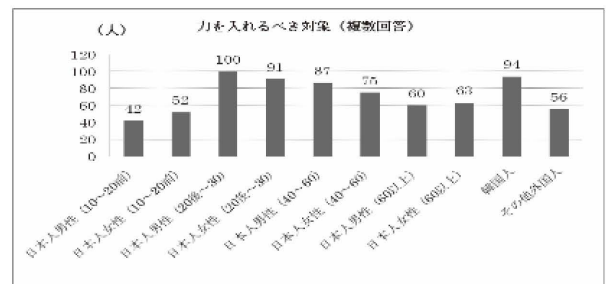


図7 上対馬でアピールすべき資源

注: 付録にある質問紙の質問7の回答を集計。

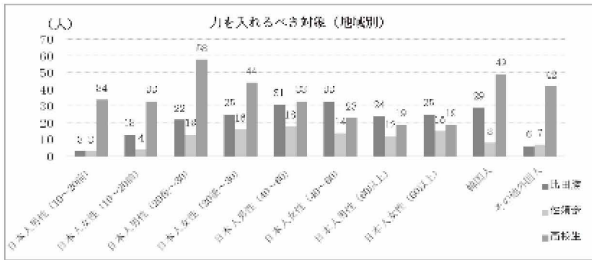


図9 上対馬の観光客誘致すべき対象（3地点別）
注：付録にある質問紙の質問8の回答を集計。

ここで本設問について、比田勝商店街・佐須奈商店街・上対馬高校の対象地別回答を比較すると、比田勝は「日本人女性（40～50代）」（33名，16%）、「日本人男性（40～50代）」（31名，15%）、「韓国人観光客」（29名，14%）、佐須奈は「日本人男性（40～50代）」（18名，16%）、「日本人女性（60代以上）」（15名，14%）、「日本人女性（40～50代）」（14名，14%）となった。特筆すべきは上対馬高校生徒の結果で、「日本人男性（20代後半～30代）」（58名，16%）、「韓国人観光客」（49名，14%）、「日本人女性（20代後半～30代）」（44名，13%）の順となり、商店街にみられた傾向とは異なる特徴が示された（図9）。

③上対馬に合う観光形態とは

「バスを貸し切ったのバックツアー」（107名，38%）、「4～5人の小規模ツアー」（106名，38%）の2つの回答が突出して多く、次いで「個人旅行」（37名，13%）、「家族旅行」（15名，5%）となった（図10）。

ここで本設問について、比田勝商店街・佐須奈商店街・上対馬高校の対象地別回答を比較すると、比田勝商店街は「4～5人の小規模ツアー」（47名，59%）、「バスを貸し切ったのバックツアー」（13名，16%）、「個人旅行」（11名，14%）、佐須奈商店街は「4～5人の小規模ツアー」（24名，55%）、「バスを貸し切ったのバックツアー」（9名，20%）、「個人旅行」（6名，14%）となり、上対馬高校生徒は「バスを貸し切ったのバックツアー」（81名，58%）、「4～5人の小規模ツアー」（25名，18%）、「個人旅行」（19名，13%）という結果になった。2つの商店街はほぼ同じような回答の傾向であったのに対して、上対馬高等学校生徒はバスを貸し切ったのバックツアーの割合がかなり高いことがわかる（図11）。

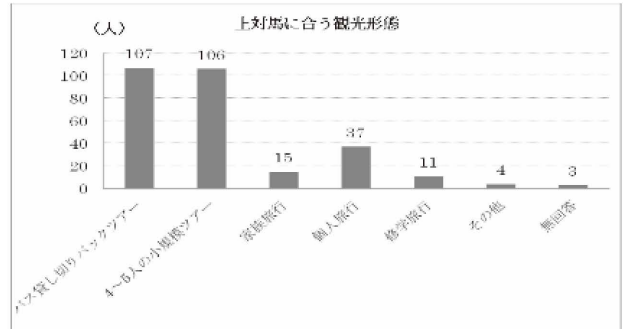


図10 上対馬に合う観光形態
注：付録にある質問紙の質問9の回答を集計。

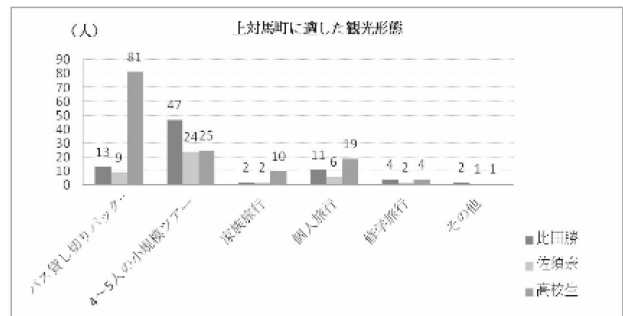


図11 上対馬に合う観光形態(3地点別)
注：付録にある質問紙の質問9の回答を集計。

3. 3 エコツーリズムに対する意識

アンケート用紙に、エコツーリズムとは「与える負荷を最小限にしながら自然環境を体験・学習し、観光の目的地である地元に対して何らかの利益や貢献のある観光」⁸⁾という説明文を付記し、その後段に「エコツーリズムの考え方に共感できますか?」という設問欄を置いた。これに対しては、「かなりそう思う」（83名，29%）と「ある程度そう思う」（124名，44%）を合わせた回答が約7割を占めた（図12）。

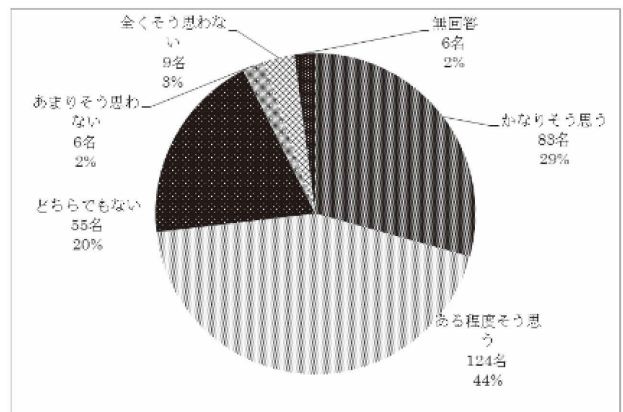


図12 上対馬住民のエコツーリズムに対する意識
注：付録にある質問紙の質問10の回答を集計。

エコツーリズムという言葉は聞いたことがなくとも、少なくともその考え方については共感するという回答が圧倒的多数の結果となった。自由筆記の回答に注目すると、肯定的な理由としては「対馬には貴重な動物など沢山いるから。」（上対馬高校、16、女、学生）、「日本全国で観光地が観光客自身によって汚されていく現状でとてもそう思います。」（比田勝、24、男、その他）、「自分の体験した自然を他の人、後の世代にも残したい。」（佐須奈、37、男、公務員）、などが代表的なものとして挙げられた。

一方で、「あまりそう思わない」（6名、2%）と「全くそう思わない」（9名、3%）と回答したエコツーリズムに対する否定的な理由としては、「自然も大切だと思うが、発展した町にもなってほしいから。」（比田勝、22、女、その他）、「通常観光は遊び、いやし、楽しむことにウェイトをおく人が多いのでエコツーリズム等の高尚な理屈を相入れる人は少ないのではないか？」（比田勝、57、男、自営業）、「自然保護とハード整備のバランスがむずかしいのでは。」（比田勝、34、男、公務員）、などが挙げられた。

3. 4 自由意見

ここで、自由回答欄（付録にある質問用紙の質問12）に記載された記述をKJ法により分類した結果を示す。すなわち、上対馬地域がかかえる3つの対象（住民・地方自治体・商店街）のもとにさまざまな課題が存在することがわかり、さらにそれぞれに属する具体的な指摘内容が分類された（表1）。

表1 上対馬地域の観光に関する課題(自由意見)

対象	具体的内容
住民	<ul style="list-style-type: none"> ・意識改革…旅行関係者以外の一般市民。特に高齢者。 ・リーダーの養成…住民の団結。 ・観光ガイドの養成。
地方自治体	<ul style="list-style-type: none"> ・交通手段の確保…下対馬～上対馬までの移動。船の発着時間。 ・PR活動。
商店街	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街のあり方…営業時間。創意工夫。 ・食の充実。 ・食事の際の「持ち込み」問題。
行政・商店街	<ul style="list-style-type: none"> ・宿泊施設の整備。
住民・行政	<ul style="list-style-type: none"> ・ごみ問題⁹⁾の改善。

注：付録にある質問用紙の質問12の回答を集計。

これらの課題は上対馬地域に限らず、他の島嶼や本土においてもみられるものだが、エコツーリズムをはじめとする観光の成立条件として、地域住民の幅広い理解が求められる点はとくに注目する必要がある。彼らは日常生活においては、自治体職員や商店街の住民にくらべ、一般的に観光客との接点が少ない。しかし、持続的な観光の展開を図るには、観光資源を長年保全してきた当事者である地域住民の理解は、もっとも不可欠なものである。

4. 考察

前章のアンケート結果から、約8割の上対馬の住民が、自らが暮らす上対馬地域において「観光」が重要な役割を持つと考えていることが分かった。観光が重要な役割を持つと考える住民は、過疎化や少子高齢化の進行により衰退が著しい多くの島嶼部と同じく、観光を地域振興の起爆剤としてとらえている。そして、観光客が上対馬地域の宿泊施設や店舗を利用することで地域経済に波及効果をもたらすことや、新しい観光形態として固有の自然や文化を活かすエコツーリズムの仕組みを導入するなどして交流人口が拡大することに期待を寄せている。観光が重要な役割を果たす理由として、「今の上対馬の現状では観光客でも来ない限り、どんどん衰退して行くと思うから。」（比田勝、44、男、自営業）¹⁰⁾というような回答も多く、観光の力に期待しているのである。残り2割にあたる観光があまり重要とは考えていない住民の意見は、自由筆記の回答（付録にある質問紙の質問4）から大きく2つに分けられる。1つは、観光スポット・交通網の未整備や受け入れ態勢が整っていないなどの理由から観光地には不向きであるというもので、もう1つは観光客の増加により上対馬の自然が破壊されてしまうことを懸念するものである。これらは観光のもつプラスの効果にばかり目を向けるのではなく、地域で提供可能なものの精選の必要性や、観光がもたらす負の側面についても目を向けるべき指摘ととらえられる。

3. 1の②「今の上対馬はよい観光地と感じるか」という問に対する回答も比較的二分された。この結果のみに注目すると、観光地としての自然資源の魅力に乏しいのではないかという見方もできる。しかし自由筆記欄の回答理由をみると、いずれの立場の回答も、上対馬地域特有の自然や文化は観光資源としての魅力を備えているが、受け入れ態勢が整っていないために「よい観光地」とは言えないととらえているものが多かった。このことは「観光」があま

り重要ではないと回答した理由の自由筆記欄にあった、「海も山もマナーが良くなければ自然を壊すこともある地域振興よりも自然のほうが大切だと思うから。」が象徴的に表している。同様の意見はアンケートの自由回答に多数指摘されており、この点は上対馬地域において観光を成り立たせる上で、留意すべき住民意識としてとらえておく必要がある。

では、上対馬地域の魅力ある観光のあり方とはどのようなものであろうか。3. 2の①「上対馬の「観光」で何をもっとアピールすべきか」という設問を振り返ると、283名の回答者に対して229名(81%)が「自然(海)」を選択し、180名(64%)が「自然(山)」を選択したという結果から、住民は上対馬を訪れる観光客には自然資源を活かすべきであると考えていること、すなわちエコツーリズムへの志向性が見いだせる。

上対馬の魅力である「自然」をより多くの人(観光客)に知ってもらうことを目的とし、適正な観光客数の受け入れによって自然環境の保全との両立を図るエコツーリズムは、今後、上対馬地域の観光において重要な仕組みとなることは間違いない。ただし、島嶼という空間的完結性の高さも手伝って、急激な観光客の増加は肝心な自然環境資源の劣化や滅失を招きかねない(Orams, M.B., 1995; Kakazu, H., 2009)。高い不可逆性のもとに存在している自然環境を活かすには、本格的にエコツーリズムの仕組みを構築する前に、理念を具現化するための入念な準備が求められる¹¹⁾。

上対馬地域の観光客誘致すべき対象については、とくに上対馬高等学校の生徒が若年層の国内観光客とともに韓国人観光客を挙げる割合の高さが特筆される。つまり、上対馬地域においてエコツーリズムの取り組みを進めるにあたって、将来の担い手となる世代には、韓国人観光客への抵抗感が少ないと言える。それに対して、現在来島している韓国人観光客との接点が比較的多い比田勝商店街と佐須奈商店街の住民は、実際の経済波及効果の問題¹²⁾やマナー上の誤解に直面しているといった点が影響したのか、高校生ほどの高まりはみられない。たとえば食堂など外食をする際、日本人は飲食物の持ち込みを店員に無断でおこなうことはないが、韓国ではそのような行為は特に咎められるものではなく、原則として「持ち込み」できるのが当たり前とされている。この点は、相互の文化の違いを知らないことで思わぬ誤解や対立の感情を生むことになりかねないので注意が必要である。今後も引き続き韓国人観光客の増

加が予想される対馬ならではの課題と言えよう。さらに、エコツーリズムの対象者として韓国人観光客を迎えるケースも当然増加していくと考えられるが、習慣の相互理解を前提とした上で、韓国人にとってなじみのある「オルレ」方式の導入や、日本人観光客も含めた自然観光資源への価値認識を高める機会の拡大が求められる¹³⁾。

上対馬地域に適した観光形態については、上対馬高等学校生徒のバス貸し切りバックツアー、比田勝商店街の住民の「4～5人の小規模ツアー」を挙げる割合の高さが目立った。現在、国内観光客と韓国人観光客のいずれも人数の面ではバックツアーで訪れる割合が高い¹⁴⁾。上対馬高等学校の教職員への聞き取りによれば¹⁵⁾、公共交通機関は本数も少ないため貸し切りバスの方が利便性に優れていると考える生徒の割合がもともと高いといった点をご教示いただいた。いずれにしても、エコツーリズムの仕組みづくりにあたっては、島嶼内を循環する移動手段がどのように提供可能なのかも事前に入念な検討事項なのである。

また、エコツーリズムで地域を活性化させることは、「観光開発が成功しているようにみられる地域であっても、それが地域住民の生活環境や就業機会の拡大に直接的に結びつくことは難しい」(谷川, 2003)というように、先進地とされる屋久島などにおいてもいまだに模索の中にある。これらの地域で経済波及効果が生まれにくい大きな理由は、島外の企業が観光ツアーを組み、その地域を活用してエコツーリズムを行い、利益はその企業に入るといった流れにある。エコツーリズムは自然や文化といった地域資源の保全と活用の主体が地域住民側に存在する点に大きな特徴があり、国内外の観光客のいずれを対象とした場合でも変わらない理念である。韓国人観光客の多くも、対馬を訪れる目的にトレッキングや自然との触れ合いを挙げる。まずは「色々なことに取り組む場合団結や協力が必要(一部であっても効果が少ない)」(比田勝, 39、男、公務員)¹⁶⁾という意見に代表されるように、個人単位から住民単位へとエコツーリズムの浸透を図る際に何を始めるか、その第一歩となる「合意形成」の機会の積み重ねが必要ではないだろうか。そのような場があれば、「力を入れるべき対象」や「観光形態」といった幅広い観点にも、住民意識を始点とした共通の目標が見いだされていくと考えられる(柴崎ほか, 2008; 深見, 2012b)。

また「エコツーリズム」と一口に言っても、上対

馬地域の住民自身が自地域の地域資源についてどのくらい知っているのだろうかという自問自答の壁にぶつかることがあるかもしれない。他人に何かを紹介するには、まずは自らがそのことをある程度知っておかなければならない。海や山や文化といった地域資源を、まずは住民が向き合い再発見していく機会が必要である。その際に、上対馬地域住民がエコツーリズムに対して7割以上が共感している点は、空間的完結性の高い島嶼においてより効果的な仕組みづくりにつながる意識が存在すると評価される。

ここで注目したいのは、エコツーリズムという言葉が持つイメージである。そのことを如実に表していたのが、3. 3の自由筆記回答「エコツーリズム等の高尚な理屈を相いれる人は少ないのでは」(比田勝、57、男、自営業)¹⁷⁾であろう。仕組みづくりの過程で、エコツーリズムは決して難解な考え方ではないという意識の醸成を丁寧に図ることが重要となる。この点については、島嶼では「地域住民と自然環境の距離は近く、人と自然の関係性」が密接であることから、暮らしそれ自体が島嶼の「重要な資産」であることを広く共有するべきである(敷田, 2006)¹⁸⁾。エコツーリズムは決して地域住民にとって遠い存在ではない。いまあるものを活用し、住民のみならず観光客にも保全との両立について理解を求め志向していくことが、いずれの立場の人びとにとってもプラスの波及効果をもたらす結果につながると言える。

5 おわりに

本稿は、上対馬地域の住民が上対馬の観光をどのように評価し、自然観光資源を活かした観光(エコツーリズム)に対してどのような意識を有しているかをアンケート調査により明らかにし、今後の地域にとって役立つエコツーリズムの仕組みづくりに関する問題点について議論を進めてきた。

その結果、上対馬地域では、新たな交流人口の拡大を図るにはエコツーリズムによる取り組みが有望であることを明らかにした。そのなかでも対馬が有する、非移転性や固有性の高い自然や文化といった地域資源に根差したこれらの展開は、住民どうしの合意形成といった地道な仕組みづくりがなされてこそ持続可能なものとして定着すると指摘した。

さらに特筆すべきは、他の日本国内の島嶼にはほとんどみられない、韓国人観光客の増加という現状を踏まえたエコツーリズムのあり方を早急に検討すべきである。幸いに韓国においても「オルレ」をは

じめエコツーリズムのような観光形態に関心が高まりつつあり、彼らは対馬におけるエコツーリズムを考える上で成否を握るほどのインパクトをもたらす対象と認識しておくべきだろう。さらに、2012年に入り竹島問題をめぐる政治的対立は、日韓相互の観光客数に影響を与えることが考えられる。対馬は日本の中でもその先端にさらされているともいえ、エコツーリズムが相互理解の機能も果たすのか大いに注目される場所である。

2011年10月、JR九州は比田勝と釜山との間に新たな定期航路を開設し、「5年以内に現在の倍以上の20万人の韓国人旅行者をお迎えし、地元が潤い喜んでもらえるようにしたい。」と目標を掲げた¹⁹⁾。日本のなかでも島嶼部は少子高齢化や経済市場規模の縮小傾向は速度を増している。そのようななかで、観光客が増加することは少なくとも島嶼の住民にとって喜ばしいことと言われる。しかし、観光客の急増や地域への理解を伴わない流入は、むしろ観光により地域を疲弊させることになるだろう。前述の定期航路開設の際、JR九州社長は「まずは5年間、懸命に地域づくりに努め、地域が活性化することが重要」と述べているが²⁰⁾、この期間がまさしく上対馬におけるエコツーリズムの仕組みづくりに丁寧に取り組む期間と考えることもできよう。

本稿では、これからエコツーリズムの取り組みが活発化することが予想される地域の住民意識に重心を置いてきたが、島嶼観光のなかでエコツーリズムがどのような状況にあるのか、上対馬地域は相対的にどのような状況にあると評価されるのかといった点や、そもそも観光客を送り出す側(観光旅行者)への訴求のあり方にまで言及することはできなかった。記して今後の課題としたい。

付 記

本研究をすすめるにあたり、対馬観光物産協会上対馬支部の皆様、上対馬高等学校生徒の皆様、比田勝・佐須奈商店街をはじめとする上対馬地域の住民の皆様にはアンケート調査でご協力いただいた。記して感謝申し上げる。また、本稿の内容のうち、アンケート調査票の配布と収集は梅野美寿恵氏(大日本印刷株式会社勤務)が担当した。

なお、本研究は、科学研究費・基盤研究(B)「正負の生態系サービス経済評価のための環境経済・倫理・法政策・生態学の融合研究」(研究代表者:吉田謙太郎)の一部を使用した。

注

- 1) このことを指摘したものとして、山田誠 (2004)、皆村 (2006) が挙げられる。
- 2) その結果、2003年の521万人から2010年に861万人へと約1.7倍増加した。ただし翌年は東日本大震災の影響もあり、622万人と急減した。
- 3) 対馬と韓国との国際航路は1989年の比田勝-釜山間の小型旅客船「あをしお号」の就航 (不定期) が始まりである。1996、97年に長崎県・旧厳原町は厳原港の国際ターミナルの整備を開始し、1997年に厳原港国際ターミナル、1999年に比田勝港国際ターミナルが開設された。その後、1999年に厳原-釜山間に韓国資本の大亜高速海運による高速船「シーフラワー」 (不定期) が就航した。2000年からは定期運行となり、2001年には比田勝-釜山間も運行が開始されるなど、ピジット・ジャパン・キャンペーンにつながる素地が形成されていた。
- 4) 比田勝、佐須奈の商店街や、対馬観光物産協会上対馬支部での聞き取り (2011年7月20日実施) による。
- 5) エコツーリズムの理念と実際については、深見 (2011) に詳しい。エコツーリズムは自然環境資源なしでは成り立たない一方で、観光客がその保全目的に適さないニーズや、受け入れ側の短中期的な経済利潤の優先ともとれるシーズの提供により、エコツーリズムを具現化するには、相応の時間的準備が不可欠である 田代 (2011)。
- 6) 敷田 (2006) より引用。
- 7) 観光客が商店街を訪れ買い物をする機会、すなわち土産品店や日用品等の購入といった観光客の直接的行為による波及効果は決して高くはない。一方で、旅行・宿泊業者が観光客に提供する食材や備品を購入するなど間接的な波及効果のほうが地元の商店街にとって大きい場合もある (須田, 2003)。
- 8) エコツーリズムの定義にはいまだ多くの議論がなされており、ここで示したものが絶対唯一のものではないことを断っておく。
- 9) 韓国からの漂流ごみを含めたごみの存在が景観に与える影響を指摘したもの。また、対馬では山や海への住民のごみのポイ捨てが多く問題となっている (NPO法人環境カウンセリング協会長崎, 2010)。
- 10) 付録にある質問紙の質問4の回答より。
- 11) たとえば深見 (2012a) において、屋久島を例に挙げ、「エコツーリズムというものの本来的な意味や割が広く共有されていないこと」が問題点として指摘されている。
- 12) 国土交通省都市・地域整備局が2008年に刊行した『都市・地域レポート2008』によると、対馬を訪れる韓国人観光客の約8割がバックツアーで訪れているという。
- 13) 「オルレ」は、「家に帰る細道」を意味する済州島起源の韓国語。対馬をふくむ九州では、九州観光推進機構が中心となり「九州オルレ」コースを策定している。2012年2月にはその第一弾として佐賀県武雄コースなど4コースが設定され、今後追加されていく予定である (2012年5月2日付け西日本新聞記事による)。里山や自然景観、地域の文化や食を楽しむという趣旨は、広義においてエコツーリズムの一種と位置づけられる。
- 14) 上掲 12)。
- 15) 2012年7月22日のアンケート調査票回収時におこなった聞き取りによる。
- 16) 付録にある質問紙の質問12の回答より。
- 17) 付録にある質問紙の質問11の回答より。
- 18) 同じく敷田 (2006) において、島嶼のエコツーリズムにおける観光と保全のバランスを取る際に「一方的な保護は採集や漁業なども含めた離島の歴史的、民俗的な自然環境とのかかわりまで否定しがち」であることに警鐘を鳴らし、「それは島の住民が「地域外の論理」に他律的に従うことであり、外部者による開発と本質的な差は少ない」と述べている。筆者もこの指摘を支持する立場であり、エコツーリズムは自然環境資源の保全が第一義的に登場するものであるが、とくに日本のような自然環境との共生を図る文化も含めてとらえることで持続的な展開が可能になるものと考えている。詳細は、深見 (2007) を参照されたい。
- 19) 2011年7月20日付け西日本新聞記事による。
- 20) 同上。

参考文献

- 市田飛鳥・林 浩二・細川夏実 (2005) : エコツーリズムにおける地域環境保全の役割—沖縄県・石垣島におけるWWFしらほサンゴ村体験ツアーを事例として—, 大妻女子大学紀要 (社会情報系) 社会情報学研究, 14, pp.141-155.
- 大田理那 (2012) : 離島観光モデルから見た2009年

- 十島村皆既日蝕ツアー—小規模外洋離島における観光資本と自治体の相補関係—。地域政策科学研究, 9, pp.1-16.
- 佐藤快信・藤崎亮一 (2011): 対馬における観光振興の可能性—上対馬町地域を事例に—。長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要, 9 (1), pp.23-29.
- 敷田麻実 (2006): 離島振興におけるエコツーリズム—島の未来をエコツーリズムは担うのか—。観光, 482, pp.15-18.
- 柴崎茂光・庄子康・柘植隆宏・土屋俊幸・永田信 (2008): 世界遺産管理における住民参加の可能性—鹿児島県屋久島の島民意向調査から探る—。地球環境, 13 (1), pp.71-80.
- 島川 崇 (2009): 国境周辺地域におけるインバウンド観光の振興に関する考察—対馬を訪れる韓国人観光客を事例として—。東北福祉大学研究紀要, 33, pp.307-318.
- 須田 寛 (2003): 『実務から見た新・観光資源論』。交通新聞社。
- 田代雅彦 (2011): 条件不利地におけるツーリズム事業の発展要因。経済論究, 139, pp.77-98.
- 谷川典大 (2003): 鹿児島県硫黄島におけるツーリズムの現状と課題。島嶼研究, 4, pp.99-111.
- 深見 聡 (2007): 『地域コミュニティ再生とエコミュージアム—協働社会のまちづくり論—』。青山社。
- 深見 聡・井出 明 (2010): 観光の本質をさぐる—歴史観光論と復興観光論の立場から—。『観光とまちづくり—地域を活かす新しい視点—』。深見 聡・井出明編著, 古今書院。
- 深見 聡 (2011): 環境保全と観光振興のジレンマ—屋久島を事例として—。地域総合研究, 39 (1・2 合併号), pp.43-52.
- 深見 聡 (2012a): 地域と観光—屋久島の現状から考える。『地域環境政策』, 環境政策研究会編, ミネルヴァ書房。
- 深見 聡 (2012b): 屋久島から考える環境保全と観光振興。地域経済情報, 266, pp.2-5.
- 堀江加奈子 (2006): 集落における観光意識と離島に対するニーズ—対馬における志田留・田ノ浜の集落空間とくらし その4—。日本建築学会関東支部研究報告集II (建築計画・都市計画・農村計画・建築経済・建築歴史・意匠), 76, pp.133-136.
- 皆村武一 (2006): 『村落共同体崩壊の構造—トカラの島じまと臥蛇島無人化への歴史—』。南方新社。
- 宮内久光 (2009): 日本の人文地理学における島嶼研究の系譜 (3)。人間科学, 23, pp.131-165.
- 山田 誠 (2004): 南西諸島の経済振興策と形骸学アプローチ。地域政策科学研究, 創刊号, pp.113-137.
- 山田吉彦 (2007): 韓国に奪われた観光地「対馬」のこれから。新潮45, 26 (6), pp.82-89.
- NPO法人環境カウンセリング協会長崎 (2010): 『学生グローバルサミット2009感想文集』。
- Hall, C.M. & Lew, A.A. (2009): *Understanding and Managing Tourism Impacts: An Integrated Approach (Contemporary Geographies of Leisure, Tourism and Mobility)*. Routledge, New York.
- Kakazu, H. (2009): *Island Sustainability: Challenges and Opportunities for Okinawa and Other Pacific Islands in a Globalized World*. Trafford Publishing, Victoria.
- Orams, M.B. (1995): Towards a more Desirable form of Ecotourism. *Tourism Management*, 16 (1), pp.3-8.

付録：質問紙

質問 1. あなたは旅行が好きですか？ 1つ選んでください。

- a. かなりそう思う b. ある程度そう思う c. どちらでもない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

質問 2-1. **質問 1**で a, b を選択した方のみお答えください。

あなたはどのような旅行を好みますか？ (最大3つまで選んでください)

- a. 観光スポット巡り b. 食べ歩き c. 山登りやキャンプ等自然体験
d. 買い物 e. 歴史探訪 f. その他 ()

質問 2-2. **質問 1**で c, d, e を選択した方のみお答えください。

その理由は何か？

質問 3. あなたはこれからの上対馬町の地域振興において「観光」は重要な役割を持つと感じますか？ 1つ選んでください。

- a. かなりそう思う b. ある程度そう思う c. どちらでもない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

質問 4. 質問 3 でそう答えた理由は何ですか？

例) 豊かな自然を多くの人に知って欲しいから。など、箇条書きや短い言葉でお答えいただいても構いません。

質問 9. あなたが上対馬に最も合うと考える「観光」形態を 1つ選んで下さい。

- a. バス等を貸し切ったのバックツアー観光
b. 4~5 人の小規模ツアー観光
c. 家族、新婚旅行
d. 個人旅行
e. 修学旅行
f. その他 ()

次に、つぎの文章をお読みください。

※エコツーリズムとは※
自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかたをいいます。

質問 10. あなたはこのエコツーリズムの考え方に共感できますか？

- a. かなりそう思う b. ある程度そう思う c. どちらでもない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

質問 11. 質問 10 でそう答えた理由は何ですか？

質問 12. その他上対馬の地域振興や観光についてご意見、ご感想などありましたら自由にお書き下さい。

質問 5. あなたは今の上対馬町はよい観光地であると感じますか？ 1つ選んでください。

- a. かなりそう思う b. ある程度そう思う c. どちらでもない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

質問 6. 質問 5 でそう答えた理由は何ですか？

質問 7. 上対馬の「観光」において何をもっとアピールすべきだと感じますか？ (最大3つまで選んで下さい)

- a. 自然 (山) …山の幸料理、植物や昆虫、鳥類等。
また、それらを生かしたイベント
b. 自然 (海) …魚の幸料理、シーカヤック等。
また、それらを生かしたイベント
c. 歴史
d. 伝統文化
e. 食
f. 町並み (“長崎さるく”のようなまち歩き)
g. 人々との交流 (民泊も含む)
h. その他 ()

質問 8. 今後上対馬が観光客の誘致に力を入れるべき対象は誰だと思いますか？ (最大3つまで選択して下さい)

- a. 日本人男性 (10~20 代前半) b. 日本人女性 (10~20 代前半)
c. 日本人男性 (20 代後半~30 代) d. 日本人女性 (20 代後半~30 代)
e. 日本人男性 (40~60 代) f. 日本人女性 (40~60 代)
g. 日本人男性 (60 歳以上) h. 日本人女性 (60 歳以上)
i. 韓国人観光客 j. その他の外国人観光客

※各項目の当てはまるところに○印をつけて下さい※

■あなたの年齢 満 () 歳

■あなたの性別 (男 ・ 女)

■あなたの職業 a. 会社員 b. 公務員 c. 自営業 d. 農林水産業
e. パート f. 専業主婦・主夫 g. 学生 h. 無職
i. その他 ()

以上で質問は終了です。ご協力いただき、誠にありがとうございました。
ご記入漏れがないか、もう一度お確かめ下さい。